

(様式4)

学位論文の内容の要旨

矢島 玲奈

(学位論文のタイトル)

Prognostic Value of Extracapsular Invasion of Axillary Lymph Nodes Combined with Peritumoral Vascular Invasion in Patients with Breast Cancer.

(乳癌腋窩リンパ節転移節外浸潤と腫瘍周囲血管侵襲の組み合わせによる予後評価)

Annals of Surgical Oncology (in press)

Reina Yajima, Takaaki Fujii, Yasuhiro Yanagita, Tomomi Fujisawa, Takeshi Miyamoto, Tomoko Hirakata, Soichi Tsutsumi, Misa Iijima, and Hiroyuki Kuwano

(学位論文の要旨)

1) 研究背景と目的

癌のリンパ節転移におけるリンパ節外浸潤 (Extracapsular invasion: ECI) は種々の癌において予後因子であることが報告されている。乳癌の腋窩リンパ節転移における ECI はリンパ節転移の広がりに関与すると報告されているが、予後に与える影響は一定の見解を得ていない。本研究では、腋窩リンパ節転移における ECI が、乳癌症例の予後予測因子となりうるか検討した。

2) 研究方法

2003年から2007年の期間に群馬大学大学院 病態総合外科及び群馬県立がんセンターにて、根治手術施行した乳癌症例 810症例のうち、浸潤性乳管癌かつリンパ節転移陽性の確定診断を得た154症例を対象とした。術前化学療法施行例は除外した。リンパ節転移における ECI の有無と臨床病理学的因子（年齢・腫瘍径・リンパ節転移・組織型・脈管浸潤・ホルモンレセプター発現・HER2発現）及び乳癌再発予後との関係について統計学的に検討した。

3) 結果

ECI と臨床病理学的因子との関連の検討は、ECI 陽性群で転移陽性リンパ節数が多く、また腫瘍における高度のリンパ管侵襲と関連を認め、ECI はリンパ行性転移の広がりに関与する可能性が示唆された。ECI と再発予後の関連の検討では、局所再発、遠隔転移共に ECI 陽性群に有意に多く認められた。乳癌特異的生存 (CSS) および無再発生存 (RFS) の検討では、両生存曲線ともに ECI 陽性群で有意に生存率が低下しており、ECI 陽性は予後不良因子であると考えられた。CSS 及び RFS に関連する臨床病理学的因子の検討では、ECI 陽性は単変量解析では CSS、RFS 共に有意な関連を認めたが、多変量解析では有意差はなく独立した予後因子とはならなかった。次に、血行性転移を反映する腫瘍周囲の血管侵襲 (PVI) に着目して検討したところ、ECI 陽性かつ遠隔臓器再発例では全例において PVI が陽性であった。そこで、ECI と PVI の組み合わせによる予後評価

を行なったところ、ECI陽性かつPVI陽性群においてCSS、RFSともに最も予後不良であり、ECI陽性でもPVIが陰性であれば両生存曲線ともにECI陰性群と有意差は認められなかった。

4) 考察

これまでの報告では、乳癌症例のリンパ節転移におけるECIの予後因子としての意義はさまざまであり、今回の検討でもECI陽性は独立した予後因子とはならなかった。その理由として、ECIは腫瘍の浸潤能を反映すると同時に、リンパ行性転移に強く関連しており、全身性の転移よりリンパ行性転移を反映する因子である可能性が示唆される。そこで全身性、血行性の転移を反映すると考えられるPVIと組み合わせることにより、リンパ行性転移にとどまるECI陽性例を除外し、より遠隔転移再発を反映している症例を予測できる可能性が示唆される。

5) 結語

乳癌の腋窩リンパ節転移陽性症例においてECIの評価に加え、PVIの評価を組み合わせることにより、再発予後を予測できる可能性が示された。ECI陽性かつPVI陽性の乳癌症例は遠隔転移のリスクが高いため、より強力な術後補助療法を検討する必要性も示唆される。